

戊辰戦争と柴崎村

明治元年（1868）8月25日、津川に進出した西軍は若松に向かっていました。その一部が29日の夜明けから、長州・岩国（ともに現在の山口県）・松代（現在の長野県）・新発田（現在の新潟県）の藩兵が柴崎に上陸し、午後4時30分頃、石坂峠から滑沢地内に砲を打ち込み三方向へ攻め入りました。新郷での戦いは9月2日で終わりましたが、柴崎には同6日までの8日間滞在しました。作戦の指令や後始末の任務があったからだと思われます。

8日間の滞在者はのべ3,207人で3,199人が21軒に泊まり、1日1軒につき平均19人となります。84人や75人の大人数を泊めている家もあります。この8日間に必要なものは柴崎からその多くを調達しました。1番多いのは割木20軒から16柵で7両余、炭・大だれ（仮の小屋の周りを覆うもの、壁の代わり）も求め、村内3か所・舟場道2ヶ所の不審番や橋立境・井谷境に小屋掛けをしたからだと考えられます。また、大根や里芋・葱などの野菜のほか、味噌・しょうゆ・茶や酒一斗樽なども買っていますが、米は記録に出てきません。松明・筵・楮からなどもあり、総額28両余のお金を支払っています。

陳ヶ峯から館原（現在の喜多方市山都町）に進んだ西軍は、大家の肝煎宅前で会津藩兵2人を殺し、6人を生け捕りにし、さらに3人の農兵を柴崎の舟場で殺しています。

柴崎では嘉永6年（1853）7月8日に2軒を残し、23軒が焼ける大火があり、15年後の戊辰戦争でこの混雑。2件とも大きな出来事で村民は混乱し、肝煎は先頭に立ち、対処したと思われませんが、村民には不満が残り、それがやがてヤーヤー一揆の肝煎宅長押しのこぎりの鋸引きとなったようです。



現在の柴崎



旧肝煎宅に残る
ヤーヤー一揆の傷跡

今月の表紙

今月は、9月11日に行われた第15回市町村対抗軟式野球大会より。試合には敗れてしまいましたが、少ない人数ながらも最後の1球まで食らいつく選手の姿が印象的でした。選手の皆さん、本当にお疲れ様でした。

（12ページに関連記事）

編集後記

今年も子ども園と小学校の運動会にそれぞれお邪魔してきました。次々と進行するプログラムに慌てふためきながらも、「子どもたちの一瞬を逃すまい！」とたくさんシャッターを切りました。子どもたちと同様、グラウンドをあちこち駆け回り、額に汗をかきながら作った今月号です。最近イベントなども少しずつ開催されるようになってきました。引き続き、読者の皆さんに町の様子を届けられるよう駆け回っていききたいと思えます。（秦）